

【佳作】

夏の音

今西 マチルダ（ドイツ ケルン日本語補習授業校 2年生）

「え、花火やるの？台風来てるよ？」

「大丈夫、大丈夫。なんとかなる。平成最後だもん」

「最後までんね。やりたい！」

「平成最後」という事実、もとい言葉はかなり影響力があるらしく、そんな理由で台風が来るといふのに私達は花火を強行した。

空は灰色で薄紫がかっている。変な色だ。風がゴーっと吹いて私たちの頭の上を通り過ぎて行った。昼間は力強い緑で私達を照らしていた木が、今は真っ黒に変わり、ざわざわと吹いてくる風に身を預けていた。もうすぐ風が来ると天気予報なんでものは見なくてもわかる。

「火つくかなー」

地面の上には水の入った白いバケツと風避けに守られた蠟燭が置かれている。それでも風は強く、炎がゆらゆらとはためいていた。コンビニで買った花火のパッケージを開け、三本取り出した。風に吹かれる髪を押さえながら、そのうちの二本をあかりに渡した。

「はい、あやとに渡して」

「うん」

あかりがあやとに花火を渡す。「ありがと」と小さく聞こえた。声か風に乗って何処かへ行ってしまうようだった。

「じゃあ、始めよっか！」

私は彼らの方へ行き、花火を蠟燭の火にかざしてしばらく待た。シュッと音がして棒の先端に火がつく。白く濁った煙が八月の空へと吸い込まれていった。風が横からびゅうっと吹いて火花の軌道を変えた。

「もう夏も終わりだね」

「学校も始まるね」

「あー宿題……」

花火が私たちの顔を照らしている。夏ってなんてあつけないんだろ。寂しい気持ちになるのは何故だろう。時間の流れに取り残されていく自分もどかしい。

まりんは軽井沢の寮がある高校に行っちゃうし、あかりは春からスウェーデンの高校に留学する予定だし、あやなも、ルカも、ともも、じょうも、私もみんな海外に引っ越してしまった。結局、残ったのはあやとだけ。

「みんなばらばらになっちゃったなー」

小さい頃、学校帰りに集まって遊んでいたのが嘘みたいだ。

「もう全員が揃うことはないのかな」

私達は色んな国に散らばっているから無理に思えてくる。

「もつとみんなと一緒にいたかったなー」

「うん、俺もそう思う」

大人になったら今より集まるのが難しくなってしまうのだろうか。火はだんだん小さくなって遂には消えてしまった。バケツに入

れると、じゅっと音がして、物悲しい虫の声だけが風のうなり声とともに聞こえた。おわりだ。でもまだある。

「よし、次行こう！」

パッケージから三本取り出し、みんなに渡す。花火が消え、暗くなる。じゅっと音がして風と虫の声だけが聞こえる。その作業を私達はしばらく続けた。

「あ、もう線香花火だけだ」

パッケージから一番好きな花火を取り外す。

「これで最後だね」

「うん」

蠟燭に先端をかざし、火をつける。

ぱしっ。

金色の花が咲いた。

ぱしぱしぱしっ。

花が次々と咲いては散り、また咲いては散っていった。しばらく経つと、こよりの先にこがね色の雫ができ、それはだんだん大きくなっていった。

この雫が落ちたらもう花は咲かない。

すぐに落ちませんように。

できるだけ長い時間、線香花火を見られますように。

そう願いながら線香花火の先端を見つめた。隣にはあかりとあやとがいる。それぞれの瞳に映る小さな花火大会を私たちはしばらく見守った。

ずっとこの時間が続けばいいのに。

そう思った瞬間、雫がふつつつと揺れだした。

もっとみんなと一緒に遊びたかった。

揺れが大きくなる。私の欲望が雫として現れているようだった。あともうちょっとみんなと一緒にいられたらよかったのに。

そんな私とは裏腹に花はついに咲かなくなった。

雫はどんどん膨らんでいく。

終わってほしくないのに。

夏の終わりを告げる風がびゅうっと吹いて、雫をさらっていった。